

## 「韓国伝統的打楽器杖鼓にみる身体動作の研究」

裴, 永珍

<https://doi.org/10.15017/1807048>

---

出版情報：九州大学, 2016, 博士（芸術工学）, 課程博士  
バージョン：  
権利関係：全文ファイル公表済

氏名	裴 永珍			
論文名	「韓国の伝統的打楽器杖鼓にみる身体動作の研究」			
論文調査委員	主査	九州大学	教授	矢向 正人
	副査	九州大学	教授	岩宮 眞一郎
	副査	九州大学	教授	藤枝 守

## 論文審査の結果の要旨

近年の楽器音響学や演奏科学の研究では、演奏者の運動制御と音響解析の対応づけを通して、合理的な演奏法やスキルを提案する研究が盛んに行われている。他方、研究の俎上にのぼりにくいのが、演奏音を合理的に発し響かせる以外の役割を持つ演奏動作である。それらは素早く見せたり大きく見せるための余剰的な身振りでしかないと認識されることが多かった。しかし、現実音楽を成り立たせている演奏動作は、演奏音を合理的に発する動作に加え、音色に直接影響しないこれらの動作であるとする指摘が相次いでいる。殊に、伝統的打楽器の演奏の現場では、こうした「余剰身体動作」こそが、演奏技術の継承や教育において重要であり、演奏者と聴衆のコミュニケーションを促進するとの認識が共有されるに至っている。

本論文は、韓国の打楽器である杖鼓の演奏を対象に、演奏動作と演奏音の分析、実際の楽曲における演奏動作の役割の検討を行い、演奏を行う際の余剰身体動作が、音楽と身体のリズムの融合を媒介していることを明らかにしたものである。

本論文の構成は以下の通りである。杖鼓の楽器と歴史を述べた第1章に続き、第2章では、加速度・角速度センサを用いたプロ奏者の演奏動作分析、及び録音した演奏音の周波数分析を行い、杖鼓の演奏動作には演奏音の音色に直接影響しない余剰身体動作が含まれることを明らかにした。さらに、余剰動作が含まれても含まなくても演奏音の力強さに違いがないことを聴取実験によって明らかにした。第3章では、韓国音楽の従来記譜法の問題点の検討を踏まえ、余剰身体動作を楽曲演奏時において適切に記述するための独自の演奏法表記システムである動作表を開発し、その演奏教育における有効性を評価実験により明らかにした。第4章では、動作表を用いて韓国の代表的なリズム体系であるソルチャング137種の身体動作の構造を記述しデータ化した。第5章では、第4章のデータから演奏動作と音楽の関係を分析し、上下運動、アクセント、円運動などと余剰身体動作との対応関係を詳細に検討した。検討を踏まえ、余剰身体動作は、テンポを引き伸ばしたり縮めたりするゆらぎや柔軟性に関わる役割、アクセントに対して間をとりもつことによって円滑なリズムを形成する役割、円運動を安定的に生成する役割などを担っていることを明らかにした。

本論文で得られた成果は、以下の点において学術的意義が認められる。

### 1) 余剰身体動作の認識の明確化

演奏動作における余剰身体動作の重要性は、Ridov, Hatten, Godoy らの研究において示唆されているが、それを主題的にとりあげた研究例はこれまでに存在しない。本論文は、演奏科学の研究に余剰身体動作の概念を導入し、その明確化を図った初めての研究である。この目的のために、本論文では、実験により余剰身体動作の存在を明らかにし、信頼性のあるデータと詳細な分析にもとづいて、それが実際の楽曲演奏において、スムーズなリズムや間を生み出す役割を果たしているこ

とを論証している。この結果は、音楽学や演奏科学の分野において、学術的に意義がある知見を提供するものである。

## 2) 伝統音楽の教育及び技芸の伝承現場へのツールの提供

現在、伝統楽器の教育や芸の伝承現場においてもっとも求められている楽譜は、音楽を演奏するために必要な情報を細大漏らさず記述できるのに加え、誰にとっても読みやすい楽譜である。本論文で提案しその有効性を評価実験により明らかにした動作表は、従来記譜法や舞踊譜法で記述できない演奏時の呼吸、緊張/弛緩、余剰身体動作、音楽のフレーズと演奏動作との交叉、を記述することが可能であり、かつあらゆる年齢の杖鼓学習者が使用できるため、上記の要求に応える楽譜である。さらに、和太鼓をはじめとするさまざまな打楽器の身体技法の記述にも即時の応用が可能であるため、各国の打楽器演奏の技能継承や教育に利するとともに、打楽器演奏の比較研究にとっても有用なツールとなっている。

## 3) ソルチャング・リズムのデータ化

動作表を用いてソルチャングのリズム137種をデータ化したことは、韓国音楽の音楽学研究における着実な前進である。ソルチャングを構成している長短についての知識は、杖鼓の美学ひいては韓国の伝統音楽を正しく理解するために必須であると認識されてきた。しかし、それらのリズムを身体動作まで含めて記述することは難しいとされており、口伝による芸の伝承及び教育を余儀なくされていた。本研究で余剰身体動作まで記述対象としたソルチャング・リズムの精確なデータを提示したことは、伝統音楽の演奏データの構造記述とアーカイブ化という音楽学研究の年来の課題に応えるものであり、学術的な意義がある。

総じて本論文は、的確に問題設定されたうえ綿密かつ多角的に論証されている。データ化に際しては、演奏録音の採譜のみに頼らず、韓国に頻繁に赴き伝承者と接触しながら慎重に進められており、自らプロの演奏家として杖鼓演奏を実践してきた知見が随所に活かされている。また、背景をなす韓国の音楽伝承の事情についても調査を行うなど、問題解決に必要な手順を十分に踏んでいる。全編にわたり学問的な正確さを追求しようとする研究姿勢に貫かれている本論文は、博士（芸術工学）の学位に値すると認められる。